

在外教育施設派遣報告書

元バンコク日本人学校(泰日協会学校)

(平成14年～16年度文部科学省派遣)

別海町立中西別中学校 教諭 村上 玄一郎

1 派遣国 タイ王国

(1) 地理と気候

インドシナ半島中央部に位置します。メナム(チャオプラヤ)川が南北に貫流し、流域は広大な沖積平野を形成しています。北部は山地といくつかの山間盆地、西部はミャンマーとの国境山脈、東部はコラートとよばれる低平な高原、南部はシャム湾とインド洋に面するマレー半島です。

首都はバンコク(人口750万6700人)。第2の都市はチェンマイ。観光地としてスコタイ、アユタヤ、パタヤ、プーケット島、サムイ島などの都市がある。

面積は51万4000km²(日本の1.4倍)。

気候は全体としては熱帯モンスーン気候で半島部は熱帯雨林気候。雨季は南西モンスーンの5～10月で毎日1時間程度の激しいスコールがあり、その後は何もなかったかのように晴れ気温が上昇する。乾季は北東モンスーンの11～2月でタイのベストシーズン。朝は20℃くらいまで気温が下がり、雨がほとんど降らないためすがすがしい秋空のような日々が続く。3～5月は暑熱である。湿度が高く蒸し暑い。この時期に赴任となるため赴任後体調を崩す教員家族も多い。年平均気温は28℃。



(2) 国民と政府

人口 6235万4402人(2002/7推計)。平均寿命 69.18歳(2002推計)。

民族 タイ族80%、中国系(華僑)6%、マレー人4%、インド系、ベトナム系。

気質 年長者など目上の人を敬い、礼を尽くす国民である。また、一般的に快適と楽しさを重要視し、束縛されることを嫌います。子供の面倒見が良く、妊婦やお年寄りの荷物を率先して持つことが自然にできています。

言語 タイ語(公用語)、中国語、マレー語

宗教 仏教95%、イスラム教3.8%、キリスト教0.5%

政府 立憲君主制(第9代プーミポン・アドゥンヤデート王 ラマ9世)

議会 上院200名 下院500名の二院制

首相 タクシン・シナワット

独立年月日 13世紀、スコタイ王朝成立

国連加盟 1946年12月16日

軍事力 予算19億ドル 兵役徴兵2年 兵力 30万6,600人



(3) 経済と産業

一人あたりの所得 1970米ドル(2001) 通貨単位 バーツ, Baht (THB)

為替レート 1バーツ=約2.8円

産業は労働人口の50%以上が農業に従事し、メナム川流域では米(世界5位)、高原ではトウモロコシ、サトウキビ、半島ではゴム、タピオカなどが栽培されている。米の輸出量は世界一である。ほかに水産、養鶏、野菜栽培も盛んである。地下資源ではスズ、鉄鉱石、タングステンを産出する。工業は食品加工、繊維などの軽工業

が中心であったが、70年代から日本やアメリカの企業が進出し、電機、電子産業など輸出産業が急成長し高度経済成長の段階に入った。しかし96年に輸出が不振となると、不良債権問題が表面化、海外からの投資がいつせいに引き上げられ、米ドルとの固定相場制も崩れ、97年7月タイバーツの暴落。この結果「国際通貨基金（IMF）」の支援を受けるにいたったが、金融引き締めなどの対策によりプラス成長に回復している。タイにとって日本は最大の援助国（無償資金援助300万ドル）であり、関係は深い。

(4) 治安

①タイは安全な国というイメージがありますが、殺人等の凶悪事件は人口比で日本の14倍発生しており、日本人も被害に遭うケースがあります。また、首都バンコク都においては、日本人観光客を対象としたイカサマ賭博や盗難等の各種被害も多発しています。

②タイ最南部では、同地域の分離独立を標榜する集団が存在し、関連は明らかになっていませんが、襲撃・爆弾事件等が連続発生し多数の死傷者が出ています。2004年4月には武装グループと治安当局との銃撃戦の結果、100人以上の死者が出る事件が発生、2005年1月及び2月にも、食堂やホテル近隣等で爆発事件が発生しており、テロの標的が治安関係施設に留まらず、公共交通機関、市場、飲食店など観光客も利用する施設に広がっています。また、タイ南部ソクラー県においても、2005年4月3日、同県ハジャイ市において空港、ショッピングセンター及びホテルの3か所で相次いで爆弾が爆発し、少なくとも2人が死亡、50人以上が負傷する事件が発生しました。同事件は同県における初めての大規模テロ事件であり、今後の治安情勢に注意する必要があります。

③国際テロ情勢では、2003年8月に国際テロ組織ジュマ・イスラミーヤ（JI）の最高幹部の一人がアユタヤに潜伏しているのをタイ警察が発見、逮捕しています。また、同年5月から7月にかけて、タイ南部においてもJI関係者とみられる者が摘発されており、報道によれば、取調べの結果、バンコク都内の米、英、豪、イスラエル、シンガポール各大使館及びブーケット、パタヤに対するテロ攻撃を計画していたことが判明しており、タイも国際テロと無縁ではなくなっています。

(4) 教育事情

1974年より6-3-3-4制を敷いています。義務教育は現在では初等教育（小学校）6年と中等教育前期（中学校）3年です。就学率を見ると70年代前半における以前の教育体系の下で初等教育上級は43パーセントに過ぎませんでしたが、99年には中等教育前期で90パーセント、後期で53パーセントと改善が見られました。しかしながらまだ十分とは言えません。義務教育は基本的には無償です。しかし教育財源の不足により、学校に割り当てられる予算額は少なく、年間で中学校でも子供一人あたり100バーツ（280円）に達していません。この額に生徒数を掛けた額が学校の全予算となります。したがって学校では寄付金や施設費といった名目で財源を補っているのが一般的です。特に有名校や都市の学校では高額の寄付が行なわれており、都市と農村の教育機会の格差をますます広げています。

2 バンコク日本人学校(泰日協会学校)について

(1) ステータス・設置機関など

- [学校名] 泰日協会学校（バンコク日本人学校）（タイ語） **โรงเรียนสมาคมไทย-ญี่ปุ่น**
（英語・校名） THAI JAPANESE ASSOCIATION SCHOOL
- [ステータス] タイ国私立学校（日本国文部科学省海外教育施設認定校）
- [設置機関] 泰日協会（会長：Staporn Kavitanon）
- [運営責任者] 泰日協会学校理事会
（理事長） 野呂 剛（泰日協会代表）
（マネージャー） パースク・プラカスカン（タイ側代表）
（校長） 藤田 英彰（日本国文部科学省代表）

(2) バンコク日本人学校の歴史的経過とその運営について

バンコク日本人学校は『盤谷日本尋常小学校』として1926年（大正15年）に設立されましたが、昭和20年の第二次世界大戦の終戦をもって閉鎖されました。その後現地法人の熱意により、1956年（昭和31年）に日本大使館の中に『大使館付属日本語講習会』という名称で設立されました。その時は幼稚園児も含めてわずかに28名、教職員は4名、岡崎熊雄領事が初代校長に就任しました。しかし、日本やタイ国の経済発展に伴い日系企業の進出に合わせて児童生徒の増加が続き、1972年（昭和47年）には在籍数が500名を超えたこと、また当時の日華敗訴運動とも重なって日本人学校の治外法権的な存在が問題になり、正規の学校設立が急務となりました。在タイ日本国大使館はタイ国日本人会を設置者として許可を得ようとしたが、外国人法人は学校設置をすることはできなかったため、戦後復活していた日タイの友好・親善・協力団体である「泰日協会」（1935年設立）が母体機関となって申請し、1974年（昭和49年）にタイ国私立学校法第20条1項の適用により、タイ国政府から正式に義務教育学校として認可を得ることができました。それ故名称も『泰日協会学校』となったのです。しかも大使館を始め関係者の大変なご努力で、「日本語による日本国内に準ずる教育を・・・」という在留邦人の願いがタイ国行政機関に聞き入れられ、「母国語による教育を認める」という数少ない「特定学校」としてのご厚情をいただくことができました。児童生徒増に伴って校地を移転するなど幾多の課題を乗り越えながら、1982年（昭和57年）にはラマ9世通りの現在地に校舎を新設し現在に至っています。



(3) 学校経営

①校訓 広い心で「明るく なかよく たくましく」

この校訓は、昭和37年9月1日に制定されました。広い心でとは、いろいろな事象に対して誠実に思いやることができるという心の広さと深さをもつ人であってほしいという願いが込められており、世界のどこにあっても愛される人間の育成をする必要があることを意味しています。

②教育目標 豊かな広い心を持った子どもを育てるために

- | | | | |
|----------------|------|---------------------|-------|
| (1) 思いやりのある子 | (徳育) | (2) 創造性を発揮し、積極的に学ぶ子 | (知育) |
| (3) 心身の健康をつくる子 | (健康) | (4) 国際性豊かな子 | (国際性) |

③教育方針

- 思いやりのある人になろう
- 創造性を発揮し、積極的に学ぼう
- 心身の健康を自らつくる力をもとう
- 国際人としての基礎をつくろう

④教職員（文部科学省からは定員の8割が各在外教育施設に派遣される）

教員数105名（タイ人マネージャー1名、文部科学省派遣教員64名、海外子女教育財団派遣教員21名、現地採用日本人教員1名、タイ人教員5名、英会話担当外国人教員9名、タイ人水泳コーチ4名）
事務職員数10名（日本人4名、タイ人6名）、看護婦2名（タイ人2名）
用務員17名（タイ人17名）その他警備会社から数名の警備員が常駐。
合計134名のスタッフで運営されている。

⑤児童・生徒について（小1～中3の小中併置校）

[児童・生徒数]

2002年度 1854名 2003年度 1958名

2004年度 2150名（5/1現在） **世界最大の児童・生徒数**

学級数	小1	9クラス	中1	4クラス
	小2	8クラス	中2	4クラス
	小3	7クラス+なかよし1クラス	中3	4クラス+なかよし1クラス
	小4	7クラス	合計 58クラス	
	小5	7クラス		
	小6	6クラス		

[在タイ年数]

1年未満	21.1%	5年～10年未満	17.3%
1年～2年未満	20.8%	5年～10年未満	17.3%
2年～3年未満	17.9%	10年以上	5.4%
3年～5年未満	17.5%		

[通学方法]

通学バス	90.1%
自家用車	9.6%
徒歩	0.3%

[在タイ前の居住地]

東京	224人	山形	15人
神奈川	190人	北海道・山梨・山口・大分	13人
タイ出生	178人	岡山	11人
千葉・愛知	172人	新潟・鹿児島・アメリカ	10人
静岡	95人	富山・インドネシア	9人
埼玉	94人	岩手・福井・佐賀・熊本	8人
大阪	91人	宮城・島根・宮崎	7人
兵庫	82人	香川	6人
シンガポール	35人	石川・ドイツ	5人
茨城	34人	和歌山・フィリピン・香港	4人
長野	32人	青森・秋田・徳島・高知・	3人
栃木・福岡	28人	長崎・ベトナム・台湾・	
三重・マレーシア	25人	インド	
奈良	24人	愛媛・沖縄・UAE・中国	2人
群馬・岐阜	23人	ペルー・ケニア	
福島・京都	19人	鳥取・ロシア・ラオス・	1人
滋賀	17人	ポーランド・オーストラリア・	
広島	16人	デンマーク・バングラディシュ	

⑥バンコク日本人学校理事会（2004年度）

理事長 三菱商事 副理事 丸紅 会計 東京三菱

理事 日本大使館（公使）・松下電器・倉紡・住友電気工業・三井物産・トヨタ・日本航空・住友商事・東京海上火災・伊藤忠・国際協力銀行など。

⑦教育内容

バンコク日本人学校はタイ国内に居住する小学校1年から中学校3年までの義務教育が必要な日本人子女に対し、日本の文部科学省が示す学習指導要領に準拠し学校教育を実施しています。

⑧入学資格

- ・日本国籍を有する子女であること。
- ・保護者及び子女が、タイ国に適法に在住していること。
- ・保護者が、本校の定める入学金・授業料等校納金の負担能力を有すること。
- ・日本語による教育が可能なこと。

3 バンコク日本人学校(泰日協会学校)の特色

(1)総合的な学習

①英会話学習

Bell international のスタッフ（イギリス人を中心とした白人スタッフ）による英会話学習を週2回、少人数制で行う。（補助教員として日本人教員がTTで入る）

②現地理解教育（国際理解教育）

現地校との交流を行い、児童・生徒の現地理解を深める。

自国文化理解、異文化理解が深められるよう工夫された授業を行う。

③情報教育

情報教育関連施設（40台のPCがある教室が3部屋）を活用して各学年ごとの発達段階に応じた授業を行う。

(2)タイ語学習

タイ国内の学校はタイの法律によって、必ずタイ語の授業をしなければならない。そこでバンコク日本人学校においても小1～中3まで全学年でタイ語の授業を能力別クラス編成によって週1回行っている。

(3)日本語補習

日本語能力が十分でない児童に対して、日常生活に必要な日本語を習得させ、充実した生活が送れるように支援する。対象学年は小1～2年生の日本語補習教室を希望する児童。週1回、計30時間、少人数制で行う。

(4)障害児教育(特別支援活動)

近年、在外教育施設においても障害を持った児童・生徒の増加や多様化、重度や重複化がみられるため1996年よりバンコク日本人学校に障害児学級（なかよし）が設置され、障害児学級の在り方を探ってきた。2001年からは親学級としての展開も加わり、現在小学部に8名、中学部に1名の児童・生徒に対し2名の担当教諭がなかよし学級の教育活動にあたっている。

(4)進路指導部

海外赴任している家族にとって、子供の進学問題は大きな問題の一つである。それがゆえに在外教育施設が存在していると言っても過言ではない。そこでバンコク日本人学校では多くの児童・生徒やその保護者のニーズに応えるべく、2002年より進路指導部が新設され、海外から進学する児童・生徒の進路に関わるすべての指導を行ってきた。その結果、中学部には副担制度が廃止となった。

進学問題は学力問題のみではなく、入試制度の複雑さにも起因している。バンコク日本人学校から各都道府県の公立高校の入学選抜を受けようとした生徒は、この3年間で151名、31都道府県におよび、どの年も1学期の初旬の段階では進路が不安定であり、上記のように全国から集まってくる児童・生徒のいる学校として47都道府県の公立高校の入学選抜実施要領をそろえる必要がある。また、海外から公立高校を受検するにあた



り、それぞれの都道府県で手続きが大きく異なり、手続きの複雑さから考えて情報を早く得ることが必要だからである。私立の学校へ進学を希望する生徒も多いが帰国子女に対する対応は公立の比にはならないくらい柔軟な対応をしてくれる。以下に海外から公立高校を受検するにあたり（北海道から他の都府県を受検する場合も大変）注意すべき点、各都道府県の教育委員会の入試制度の改善点などをまとめた。

①資格申請について

一般的に海外に2年間以上連続して滞在し、帰国1年未満までを帰国子女として認められる事が多い。しかし、帰国子女のとらえ方が各都道府県によって様々であるため、受験生は不公平感を感じる場面が多い。例えば島根県の場合、帰国子女としての資格を有しながらも海外の現地校に在籍していなければ帰国子女として扱われない（日本人学校出身者は帰国子女として該当しない）。そのことは入学者選抜実施要領に記載されておらず、県教委担当の口頭での指摘で判明した事実である。また、岐阜県の場合は資格申請に成績証明の提出を義務づけられた。これも入学者選抜実施要領に記載されておらず、出願間際に保護者の連絡で判明した。なぜ帰国子女としての資格申請に成績が必要なのか。卒業見込み証明で中学生としての単位取得を十分に証明できるはずである。

また、資格申請のために指定された日付に説明会に参加しなければいけない都道府県もあり海外からは非常に不便さを感じざるをえない。合格後、在留証明を提出させる東京都や長期間の説明時期を設置している他の地方自治体があるのとは比にならないほどの不便さである。

元来、帰国子女枠とは海外で生活を余儀なくされている日本国籍を有する児童・生徒が教育を受ける環境にハンディがあるため、特別枠を認められているはずである。そのハンディを埋めるよう各国に在住する邦人が多くの困難を乗り越えまたは大きな努力によって設立されている在外教育施設にあっても、言語環境や文化の違いなど児童・生徒のハンディは依然存在する。また、海外で暮らす児童・生徒はこれからの日本の国際化の発展には欠かせない存在であることを考えると、在外教育施設の児童・生徒の受検機会のハンディが軽減され、日本の高校教育の国際化に少しでも活気を与える存在に成りえるよう、各都道府県において、海外から受検する生徒に対する待遇の改善を望みたい。

②願書の入手方法について

最近では必要書類をインターネットからダウンロードできる地方自治体が多くなってきた。これは海外で暮らす受験生やその保護者にとってハンディを少しでも軽減する最良の方法である。

しかし、今だに各高校まで出願書類を直接取りに行かなければ行けない県もある。また出願書類の入手日が福岡県・兵庫県・岐阜県のように1月中旬にもなると、学校印を必要な書類の作成と私立高校の入試日程との関係で時間的に余裕が無くなる。出願書類（願書・調査書・成績一覧表）などは文部科学省指導の元、指導要録のように統一された基準が必要だと強く感じた。それは国内であっても他の都道府県から受検する際の機能的な入試事務につながるはずである。

しかし、地方自治体の独自性や教育環境の違いなどから統一が困難ならば、書類のダウンロード・要領からのコピーなど安易に書類を入手出来る方策を全都道府県で行って欲しい。

③日程について

公立の2次募集などは日程に余裕がなく、書類が不完全なまま（受験校が決定できないまま）受験者に書類を渡さなければならないこともある。公的な書類であるため受験校を決定していない状態で書類を渡さなければいけない状態を無くすには、2次募集の募集期間にもう少し日程的な余裕が必要だと感じた。

④合否の確認について

合否が掲示されずに郵送などの場合、海外の場合は大幅に遅れることが予想される。特に一期選抜・前期選抜・特色化選抜・推薦選抜・帰国選抜など一般選抜よりも早い日程で行われる入試の場合、私立高校の出願状況がその結果によって変更される場面も予想されるため、海外での受検のハンディキャップとなる。そこで海外からの場合は直接、電話・メール・FAXなどでの合否の確認が行えることが望ましい。

⑤帰国選抜について

各都道府県で帰国子女の受け入れ校が存在するが対応は様々である。北海道などは道立高校では1校、札幌市立高校の一部でしか、帰国子女の受け入れを行っていない。しかし、広島県のように全校で2名の帰国枠を設けている県や定員は未定であるが埼玉県・栃木県などは全校で帰国子女枠を設けている。海外からの受験生にとって最も平等性に欠けている制度の違いである。

(5)生徒指導部(安全管理)

海外において最も重要な要素は安全管理である。特に学校は公共の場であるばかりでなく危機的な場面においては重要な情報の拠点ともなる。本校には2000人の児童・生徒とその保護者と密接な連絡手段を確保しつつ毎日の登下校から細心の注意を払わなければいけない。2000人の児童・生徒の通学手段は90%が通学バスであり、バスは全校一斉下校になると86台が稼働する。そして、バスに乗るはずの児童・生徒が乗っているかを確認する作業が5分遅れるとバンコクの渋滞地帯を走るバスが各児童・生徒の家に着くのが20～30分遅れる。そうなると一緒に職員室の電話が鳴り始めるのである。2002年には「バスの爆破予告」が発生した。未遂に終わったがそのときの学校の安全管理がシステム化されていたことで大変有効に事態に対処できた。また、交番の設置・外部の安全コンサルタントによる不審者侵入訓練・一斉下校訓練などを定期的に行い、常に危機管理に重点を置いている。



普段の日々では中学部で校外指導などを行うこともないくらい生徒は落ち着いており、保護者からの生徒指導の信頼も厚い。

4 バンコク日本人学校(泰日協会学校)の学校行事

(1)体育的行事(大運動会)

全校児童・生徒数が2000人を越すバンコク日本人学校で運動会を行うと保護者も入れると総勢5000人がグラウンドに入ることとなる。スケジュールは分単位の正確さを要求され、児童・生徒の移動から各種用具の準備まで膨大な資料のマニュアルが必要となる。その中でも中学部の男子は日本ではあまり行われていない騎馬戦と棒倒しを伝統的に行っている。

(2)学芸的行事(小学部祭・中学部祭・合唱祭・現地校との文化交流・講演会・演奏会・小1と中3のふれあい交流)

各行事ではタイの文化を多彩に取り入れた発表や現地校との交流会ではタイ人の児童・生徒との交流を通してお互いの文化交流を長年にわたり継続している。また、タイには多くの方が訪れ本校に訪問の機会を与えられることも多い。最近では宇宙飛行士の毛利衛氏、大島文部大臣、歌手のイルカさん、元サッカー選手の奥寺氏、イラク戦争で負傷し日本で目の手術を受けたモハメド君など多くの体験談を聞く事ができた。

(3)遠足・宿泊的行事(校外学習・臨海学校・修学旅行)

すべての行事で現地理解教育が取り入れられ、児童・生徒が直接現地の人と交流する機会を増やすきっかけとなっている。特に、小6や中2の修学旅行中では旅行先の現地校(少数民族の学校や音楽学校)との交流にも力を入れている。

(4)儀式的行事(入学式・卒業式)

入学式はほとんどの生徒が転校生であり、海外生活の不安と学校生活の不安をもったスタートとなるため、学校全体で受け入れ態勢を整えている。この時期が在外教育施設では最も大切な時期でもある。

また、多くの児童・生徒が卒業後、同じ進路をとることのないため、卒業式などはクライマックス的な感動があり、儀式にふさわしい態度、姿勢が守られている卒業式である。海外に在住する日本人にとって、国旗・国歌

は心のよりどころであり日本人どうしのつながりを強く感じるものであることに気がつく。そのためか中学部の卒業式では「国歌」をアカペラの3部で合唱し、いまだに「揚げば尊し」を歌い涙する生徒が多い。

5 タイ(バンコク)の生活

(1)習慣

①王室への敬意

タイではプーミポン国王、シリキット王妃を中心とした王室が、国民の生活ととても密着しています。ご一家に対する国民の信頼は厚く、タイの街中の至る所に、国旗や王室の人々の肖像などが掲げられています。また、儀式やコンサート、映画の始まりには、必ず国王賛歌が流れ、国民はその場で起立し敬意を表します。日本人学校の各儀式でも同様です。TV,ラジオや公共の場でも午前8時と午後6時に国歌が流れます。周囲の人の動きに合わせ、失礼の無いようにしなければいけません。

②宗教の尊重

国王陛下は仏教徒であり、宗教の擁護者として憲法に位置づけられています。多くの国民が仏教徒であり、祝日も仏教に関連したものが多く、国王自ら行う宗教行事がTVの全チャンネルを通して中継されるほどです。王室への敬意の念と同様、宗教に対してもタイの人の生活に欠かせないものとして尊重しなければいけません。

たとえば、女性は僧侶に触れてはいけない、タンブン(寄進)の時も女性は直接僧侶に手渡すことができません。もちろん、バス内でも女性は僧侶の隣に座れません。また、格式の高い寺院などでは参拝の服装に制限があり、ミニスカート、短パン、キュロットなど肌を露出するものは着れません。サンダルも同様です。

(2)食生活

①日本食

バンコクで暮らしている日本人家庭の多くは、日本にいるときと同じような食生活を送っています。しかし、タイには日本のような四季がなく、それを補うために季節ごとに果物を利用するなどの工夫をしています。また、スーパーでは手に入らない食材がないほど充実した日本食材が売られています。馴染みがあるところでは伊勢丹、そごう、東急からカルフル、ロータスなどの大型ショッピングセンター、日本食専門のフジスーパーで買うことができます。しかし、日本からの輸入品は値段が1.5倍~3倍程度するので、現地で手に入る食材を利用できるようにすることが必要です。

②タイ料理

トムヤンクン・ソムタム・カウパット・バーミーなど有名なものばかりでなく種類が豊富で安価なものが数多くあります。100バーツあれば大人一人がビールを飲んで満腹になるくらい食べられるでしょう。(屋台ですが)また、熱帯気候で育った豊富なフルーツも魅力です。ドリアン・マンゴスチン、マンゴー、ソムオー、ライチをはじめ日本ではお目にかかれないおいしいフルーツを1年を通して食することも魅力です。

③世界の料理

東南アジア最大の都市、バンコクには世界各地の料理店があり、安い労働力で経営できるため安価で高級食材を食べることができます。

④バンコク日本人学校での食事

児童・生徒は基本的にお弁当を持参しています。気温が高いため常に教室は22℃前後に空調され、お弁当が傷むことを防いでいます。また、急用でお弁当を注文できない場合は注文弁当をとることもできます。教員もお弁当ですが独身教員は近くの屋台に注文して、持ってきてもらうこともあります。



(3)住居

日本人の多くがマンションに住んでいます。住居で最も優先されるのがセキュリティーです。そのため、ほとんどの教員が高級マンションに住むことになります。住居には内規があり独身で150m²、子供のいない家族は200m²、子供のいる家族は250m²となっています。ほとんどがテーブル、ソファー、家具、ベッド、テレビ、冷蔵庫、エアコンなどが完備されています。また、付属設備も充実しプール、アスレチックジム、公園、テニスコートなどがあります。

(4)医療

日本人が必要としている医療機関がバンコク都内には充実しています。日本の医大を卒業した医師や日本語が話せる看護師、通訳も常駐しています。特に日曜・祝日も平日同様に受診できるため子供がいる家族には安心できる環境です。施設も一流ホテルと間違えるほど立派で医療費も非常に安いです。多くの派遣教員は海外保険に加入しているため、医療費を気にせず気軽に受診できます。

しかし、日本にはない伝染病もありデング熱などにかかった教員や生徒もいます。水や食事には気をつけているつもりでも下痢や発熱を起こす場合もあり生ものではA型肝炎の可能性もあります。多くの病気は予防接種で予防でき、検査や薬品も安心できるものなのですぐに医療機関にかかることで安心に暮らせます。

また、歯科も高度な医療機器と技術で多くの日本人が歯科医療にかかっています。出産についてもタイ語が日本語訳された母子手帳があり、日本人会ですくすく教室なども開催されています。毎年、2～3名の教員家族で新しい家族が増えています。

(4)交通

「世界一の交通渋滞都市」といわれるバンコク市内の交通渋滞は凄まじいものがあります。交通機関はバス、タクシー、トゥクトゥク、バイク、自転車、BTSそして最近開通した地下鉄です。列車はありますが長距離用なので普段の交通では使えません。そのような交通渋滞都市なのにハイウェイを像が歩いています。

日本人学校の教員（文部科学相派遣）は内規で新車を購入し、タイ人の運転手を雇わなければなりません。交通ルールやマナーが著しく日本と違い、事故が起きた場合ほとんどタイ語しか話せないタイ人との交渉で数日、本務から離れることになるからです。自分で自由に運転ができることができない反面、運転手さんが妻や子供たちを安全に移動させてくれるので大変便利です。もちろん、新車も運転手も自費です。

(5)買い物

衣類・生活用品・電気製品・子供用品・学用品などすべて不自由なく揃います。近年、ダイソーなどの安価で品揃えの多い日本人向けの店も現れました。また、現地の百貨店も日本のデパートに匹敵する規模があります。また、市場（タラート）には超安価の品物が現地の人向けに売られています。タラートでも十分、生活必需品や野菜などが手に入るので、在タイ日本人で質を問わない人はタラートを利用しています。

(6)観光・娯楽

タイは日本からも多くの観光客が訪れる国です。また、欧米人も多く近隣の発展途上国からの出稼ぎもあるため、バンコクは名実ともに国際都市といえます。

観光のスポットとして多いのは煌びやかに装飾された寺院、安い人件費のため高級ブランドが安価で手に入るショッピング、エステ・タイ式マッサージ、国技のムエタイ、タイ料理、像などの動物観光、そしてダイビングなどが盛んなマリンスポーツです。また、ゴルフ場も非常に多く日本の5分の1ほどの金額でできます。

その他に娯楽として、フィッシング・テニス・スイミング・バドミントンなどが盛んであり、フルーツカービング・タイ料理教室・キムなどのタイ楽器教室なども人気があります。

(7)情報

タイのTVは5チャンネルあり、その他にも契約でケーブルテレビが入る。日本のNHKも海外向けの放送が入るがスポーツニュースなどはほとんどが放映権の関係で静止画像であった。オリンピックもタイの放送でしか

見られず、タイ語の案内でタイ人中心の放送を見ていた。タイ人が出場していないのにビーチバレーの女子が数多く放送されていたのは国民性だろうか。また、レンタルビデオショップが多く日本のビデオ屋さん感覚で借りることができる。違法テープも多く最新の民放番組がビデオでみられる。違法DVDなども多く、公開された映画などはその日のうちにDVD（450円ほど）が売られている。

新聞は契約すれば海外版で毎朝、家に朝日新聞が届けられる。インターネットも普及しているため大通り沿いのマンションではADSLでつながられた。郵便事情も日本ほどではないが確実に届く。日本までは首都圏なら3日で届く。はがきなら日本まで15円ほどである。電話は携帯が普及しており、FAX、通常国際電話も簡単につながる。書籍も紀伊国屋を筆頭に日本の書籍を購入できるが非常に高い。1.5倍～3倍の値段が付いているためほとんど買わなかった。

(8)日本人会

タイには約4万人の日本人が在留登録されており、登録されていない日本人を含むと7万人とも言われている。その日本人を統括しているのは大使館であり、タイ国日本人会である。派遣教員は来タイ後すぐに入会し多くの事業にも参加、運営を手伝う事になっている。上記にあるように非常に多くの日本人が日本人会に登録されているが運営を積極的にサポートする企業も限られており、結局日本人学校の教員に仕事が回ってくることになる。タイで行われる国際的行事から盆踊り大会、各種スポーツサークル、大会の運営、文化関係のサークルなど学校業務以外の仕事にも追われる。

6 雑感

多くの関係者の方々に支えられて、家族とともに3年間タイに派遣させて頂き、本当に感謝したい。長男は在タイ1年間で高校進学のため帰国したが、帰国する際に「タイへ来て本当によかった」と言っていた。多くの友人が増えたこともあるだろうが、異国文化に触れたことで視野が広がり自信にもなったようである。

日本人学校では多くの子供が海外にいるハンディを背負いながらも自己実現へ向けて頑張っている姿があった。その子供たちとふれあいながら、同じ意欲をもって臨んだ派遣教員どうしの研修にも非常に多くの得るものがあった。そして、現地のタイの人々には公私ともにお世話になり、彼らの助けがなければ海外で生活することが非常に困難になっていたと痛感する。

最後にスマトラ島沖地震で発生した津波により亡くなった同期の草津教諭の夫人の夭折に哀悼の意を表します。